次回予告

＊小屋土台石積の修復、補強
＊竈の復活

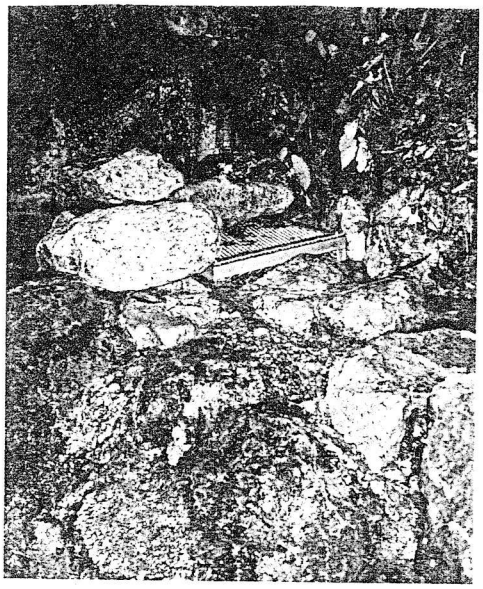
近未来目標…囲炉裏の復活

これを読まれたＯＢ諸氏へ
小屋作業は本当に心も体もリフレッシュ
できますぞ。そして実に楽しいですぞ。
いつでもあなたのおいでを待っておりますぞ。
いざ集わん　山小屋酒場へ！！

3期　田村　昭夫

山小屋酒場のマスターといたしまして、この度御来店いただきましたお客様に心より感謝いたしております。

今回御来店いただけなかったＯＢの方も、来年５月の開店には是非参加下さいますよう、御案内申し上げます。　　頓首



水場作り

13期　吉田　穂積

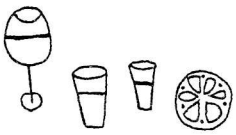
今回は水場のホース埋設作業に携わった。水場は通年設置とする為、雪に流されぬよう、ホースを土中に埋設することになる。表面はフワフワの腐葉土なのだが、その下は細かな根の張ったボロボロの土で、所々に石もあり、なかなか思うようにいかない。それでも10人近くで分担し、一人10数m位であろうか、何とか溝を掘ることができた。

バルブ付の継手にプラスチックホースをつないでいくのだが、固くて入らない。小雨の中、ガスバーナーでホースを炙りながら繋いでいった。最後の継目にきた時には、既に取水口の設置が終わり、ホースの先からはドードーと水が流れ出ている。取水口班にもう一度水を止めてもらい、全部を継ぐことができた。

雨の中の作業でかなり濡れてしまい、泥だらけにもなったが、泥だらけの方はさっそく水場で洗い流す。中にはパンツまで替えていた人もあったが、小屋の中は中で濡れた合羽がぶら下がり、なかなか通の世界であった。

皆さん、お疲れ様でした。

「山小屋酒場」板前顛末記



13期　吉本　良治

＊プロローグ

「今度の小屋作業の食料係頼むぞ」そんな電話がＣＬ辰野からかかってきたのが９月の初め。どうせ時間があるからと簡単に引き受けたが、何しろ現役時代は合宿、ＰＷとほとんどは装備係であって食料係の経験は皆無。まして最近は食卓に用意されたものを食べるだけの身であって、何から準備すればよいのか皆目見当がつかない。そんな状態からのスタートであった。

＊メニュー作り

酒場の板前としてはまず献立を決めねばなるまい。条件をあげてみると

1）酒場向けのメニューであること
2）季節感溢れるものであること
　（肉と野菜を炒めて調味料を変えるだけで幾種類もの料理にするなんていうのは論外）
3）みんなで楽しめるもの
4）日持ちがして、重量の軽い材料であること
5）春の献立に匹敵するもの

などと、考え始めるとなかなか名案が浮かばない。特に、春の「山菜の天麩羅」に匹敵するものなんて…なおさらギブアップしそうになった。

「春」が「山菜」ならば、「秋」は「キノコ」の連想から、メインを「キノコたっぷりの寄鍋」と決めることができたのが、買い出しの前日であった。「キノコ」なら、誰かが現地調達してくれるかもしれない…そんな期待も込めたメニューであった。

＊買い出し、荷作り

前日の夕刻、仕事を終えてから、台風の進路を気にしつつも、買い出しに向かう。「気乗りしない」女房殿を口説き落とし、コンサルタントとして同道する。ところが核家族の悲しい所で、４人分以上の食事を作ったことのない我がコンサルタントは15人分の量の見当がつかない。やむなく男の感覚で、米は一人一合、鍋物の材料はわが家の４倍など、かなり乱暴な決め方でようやく買い出しが終わった時には、閉店間際であった。

さらに、生物は腐らせないよう、パンは形を壊さないよう、重量はできるだけ均等になるよう、皆のザックの大きさがわからないので、できるだけ小箱に分割するよう配慮して…十数個のパッキングが完了したのが23時過ぎであった。

＊調理、味わい

食料係はどうも食事当番もせねばならない様子である。水場作りの作業から早上がりして支度にかかる。雨に打たれ続けた身には、結構な早上がりではあったが、我がコンサルタント殿よりのカンニングペーパーも雨でグショグショになり読解不能。調理順序がよくわからない。そこでベテランの舟田女子に出馬願った。何しろ、飯を炊こうにも水加減もわからない食事当番ですから。

あたりが暗くなった頃にはようやく調理も終了し、期待どおり梅君の現地調達「キノコ」も鍋に入った所で「山小屋酒場」は開店となりました。日本料理は目と舌で味わうものと、板前は苦心したのだが、暗くてよく見えない。舌だけのハンディでのお味はいかがでしたでしょうか？少なくとも、大昔に倉ケ岳ＰＷで出会った「アンパン入り闇鍋」よりは、素材が豪華な分美味であったはずと信じておりますが…。

＊思い違い

ワンゲルは大飯食らい、大酒飲みであったはずであったが。ご飯がいっぱい余り、翌朝は急遽「おじや」に変更となった。お酒はというと、日本酒、ウィスキーが全くの不人気であり、ビール、ワインが好評であった。一日の労働の後は、冷たい飲物がやはり旨い。

（ＯＢの皆様へ。特にこの部分は今後の差し入れのご参考に！！）

ワイン酒多飲（こと田村氏）と語る…

20期　松下 和隆

モチベーション

ふと手にした「やまざと（会報５号）」。それは夏休みも最後のとある８月の暑い日であった。明日からはまた仕事。今日は１日ゆっくりこれを読もうと、寝っころがってページを開いた。最初に目にしたのが、１３期の辰野さんが提案する「山小屋酒場」。OB で小屋作業をやろう。「無理せず」、「楽しく」、「迷惑をかけず」。「お代はあなたの労働です」、という呼掛けがとても気にいった。「小屋作業」ということばの響きに、私の思いは 20 年前のあの身も心も充実したワンゲル時代にトリップしてしまった。

> 犀奥に道をつける。ベルクハイムから白山まで…。これが当時の我々のテーマだった。ナタ、鎌、鋸。持てるものは何でも持ってブッシュを掻き分け犀奥にいる。「ワンゲル平」を中心に、白山に向けて、片やベルクハイムに向けて道を開く。ある時は野郎の握ったむすびを、時にはかわいい娘の手によるサンドイッチを頬張り、ひたすら道を切り開く。労働、奉仕、（ついでにブッシュに叩かれるときのマゾヒズムな感情）。これらを私はこの時の実体験から学んだような気がする。

「やまざと」のページを更にめくっていくと…。「ワイン酒多飲日記」 ３期 田村昭夫 とある。おお！ これはかの有名な田村先輩ではないか。田村先輩とはかつて２０周年記念の白山山行で一度お会いしたことがある。確か同じパーティで、とにかく変わった「おっさん」、という印象を持っていた。２０周年記念行事の一環として実施した当時の企画に「オレンジロード」というのがあった。その企画の精神に、いたく感動されていたのを今でも鮮明に覚えている。

> 「オレンジロード」…。それは金沢の部室から白山のピークまで、とにかく歩き通す、という企画だった。「覚醒」という２文字を書いた「のぼり」を背に、ひたすら歩いたのを覚えている。「ワンゲル」の原点は歩くことにある。何かを求めて「さ迷い歩く」行動にこそワンゲルらしさがある。それを２０周年記念行事でシンボルチックに演出しよう、というのが当時の我々の狙いであった。確か、２１期の田坂がネーミングしたように覚えている。
> 当時の私は２０才の学生。そして田村氏はちょうど今の私ぐらい。そう４０才の中年おやじ。その間には当然大きな世代の隔差があるはず。にもかかわらず上記の精神を賛美し、手を握って喜んでいた田村さんに私は一種の戸惑いを感じたものだった。若い。このおっさんは年令とは関係なく生きている。おそるべし…

「ワイン酒多飲日記」は一気に読んだ。酒と素粒子論と聖書と、そして倉谷のコントラストが実にいい。２０年前に会ったあの田村さんが還暦を向かえるという。もう一度会ってみたい。私はその日の内に金沢行きを決心した。

いざ、山小屋酒場へ

９／２２（日曜日）の早朝、我々は山小屋酒場こと、ベルクハイムへ向かうべく、犀川ダムサイトに集結した。荷物の仕分けとボッカの分担をする。その際、２０期の同僚、栃尾がこうつぶやいた。田村先輩のお相手は、マツに任せる。その横で、深田がコックリとうなずいた。それは、その夜の、「田村節」の洗礼を予言するものであった。

天候はあいにくの雨。それも台風前日の風雨。天高く晴れ渡った秋晴れの犀奥をイメージしていた私にはちょと残念。しかし久しぶりの犀奥に私の心は軽かった。加えて私の荷物も軽かった。

> 言い分け。実は途中で水場作りに使うホースをどっさり担ぐ予定になっていた。しかし現場に行ってみるとホースは無し。現役諸君が作業済み。おかげで私は、えろー楽させてもらいました。現役諸君に多謝。

相変わらずですね、田村さん

「労働」というお代を払い「山小屋酒場」でくつろぐ我々の前に、田村先輩が姿を現したのは、その日の昼下がりのこと。旧道の整備を終え現役諸君と伴に返ってこられた。

雨にたたられ声少ない現役たち。その中でひときわ元気に振舞うOB諸氏。OBと現役との関わり方にデリケートな一面があることをかいま見たのもこの時でした。でもこれを神経質に問題視するのは特策でないような…。OBはOBの楽しみ方を、現役は現役の楽しみ方を追求すればいい気がします。こと小屋作業に関して言えば、全くの断絶もなく、かつ適度に現役が協力してくれる（ひょとしたらいやいやかもしれないが）現在の関わり方、これが1番いいのかも知れません。親の楽しみは親になってみなければ分からないし、子の楽しみは時代と供に変化する、ってとこでしょうか？でもただ1つ私の経験から言えることは、小屋作業には「テーマ」が必要だと言うことです。現役が現役なりの（つまりその世代の）テーマを持つようになれば事態はもっと良くなるような気がします。OBが「山小屋酒場」というテーマを持って活動しているように…。

「おお、あのオレンジロードの松下君か」。車座になって始まった「山小屋酒場」。私の自己紹介に対し、かっ達な口調で応えてくれた田村さんは、２０年前と変わらない。頭は若干白くなった。一方私はだいぶ薄くなった。しかし話しはビシバシ、おもしろいように噛み合う。ワンゲル論に人生論。政治、教育、哲学に素粒子論。世の中に対する不満と希望。そしてちょっとばかしのエロ話（女性がいたので控えた）。その夜、田村さんとは、ありとあらゆる話しを時間にまかせ、夜遅くまで話した。ふと二人が気がついたときには、回りの皆さん、静かに休まれていた…。

同席の皆さん、お騒がしてすみませんでした。話題がちょっと偏ってしまったようで…。でも私めは十分リフレッシュさせて頂きました。「山小屋酒場」万歳です。

おれはワンゲルの寅さんだ！

とは、田村先輩が自らを称されることば。自分を「自由人」と称して疑わない。還暦を向かえてもなお、ユートピアを求めて「さ迷い歩く」パワーは相変わらずだ。「何時死んでもいいような生き方したい」、「まだ見ぬ明日よりも今日を充実させよう」という言葉で終るワイン酒多飲日記は、世渡りべたの不器用な人間にも力を与えてくれる。風呂やでサルマタを手拭いがわりに使う田村さん。床にこぼれた雑炊をもったいないと這つくばって食べてしまう田村さん。あなたなら「倉谷」をユートピアにすることができるかもしれません。Good luck！

クマタカ

山小屋酒場雑感

19期　栂　典雅

犀川ダムは雨だった。

どうしても出なければならなかった「きのこ会」の観察会を終えて、ダムに着いたのは午後4時を回っていた。

やっぱり帰ろうか？という思いが頭をよぎる。これでは、まるで「ただ酒」を飲みに行くようなものではないか！しかし20期の面々には「後から行く」と言ったことだし、酒場なんだから、それもまあいいか！とカッパに身を包む。

丁度下山してきた現役と二言三言、言葉を交わし、大体の状況をつかんで先を急ぐ。

小屋に着いたのは、まさに宴会が始まったところ。途中採ってきたナラタケとスギヒラタケを寄鍋に入れる。20期の松下君は、はるばる鎌倉からやってきた目的である「田村さんとの会談」に余念がない。騒がしすぎもせず、かといって暗くもない、落ち着いた雰囲気の秋の酒場の夜は更けていった。

翌朝、雨をいいことにのんびりする。それでも、10時頃から作業を始める。昨日敷設したという「水道管」の露出部分をうめたあと、せめて酒代の一部にと、テン場の整備に鍬を振るう。昨夜の田村さんの話を思い出し、テン場を農地に転用することにした。畝を立てて、ホウレン草の種を蒔く。チーフの椿川さんをはじめ、重労働をこなした方々には申し訳なかったが、こんな参加の仕方でも許される山小屋酒場がうれしい。

帰り道では、このあとも倉谷での生活を続けられるという田村さんに、栗林、ミョウガ畑、キノコの出そうな場所と、いくつかの食材確保ポイントを急遽レクチャーした。

田村さんは2週間後には、会津へ引き上げられたとのことだった。その田村さんから届いたはがきには

「せっかく種を蒔いてもらったホウレンソウを収穫せずにきたのが残念だ。人糞尿をたっぷりやっておいたので、都合がついたら収穫してきてほしい」

旨、したためられていた。

果たして、ホウレンソウは立派に生長したのか？確かめられなかったのが心残りではある。

雑感　ＯＢのこと　山小屋酒場のこと

20期　深田　進

ワンゲルＯＢは500人もいるそうだが、顔と名前が一致するのは、現役時代がダブッていた17期から23期くらいで、最近では23期あたりはかなり忘れてしまっている。

5，6年前、私の職場に、仕事で来ていた設計コンサルタントの人が「深田さん」と声をかけてくれたのだが、その人が「23期の○○です」と言ってくれたのになかなか思い出せない。家に帰ってから、名簿やら写真やらを引っ張り出して、ようやく思い出せた。すまん小阪君！

そんな状態にも関わらず、どういう訳か15期には知っている人が多い。金沢に住んで、山に登り続けていることで知り合うことができたからだ。今回の山小屋酒場では13期の方々とも知り合うことができた。

突然余談になるが、私は山登り以外の趣味として「11ケ国語を話そう」というサークル活動に参加している。

先日、そのサークルに、今回の山小屋酒場の写真を持ってきていた人がいたのには驚いた。その人が私の妻に、「これが友祐の父親よ」と言って指差したのが、13期の辰野さんだった。友祐君というのはその人の息子で、先日イギリスのホームステイから帰ってきたばかり。母親と二人でこのサークルに参加している。そんなこととは露知らず、小屋酒場では取水用の籠を取りつけるために、この人の御主人と一緒に川床の砂利を掘っていたのだった。当たり前のことだが、この母子は辰野という姓で、写真を持ってきた人は結局13期の辰野さんの奥さんだったのだ。

それからもう一人、3期の田村さんについて語らなければならない。20周年の時に白山の頂上で祝詞をあげたり、人力車をワンゲルに寄贈

してくれたりと、話題には事欠かない先輩だ。

今回はベルクハイムで長期間の生活をしておられる最中ということで、神様か仙人のような、近寄り難いイメージを抱いていたのだが、実際はとても気さくで、話しやすい人だった。

ただ、普通の人と違うと思ったのは、学生時代そのままの情熱を今も持ち続けている、大変な熱血漢ということだ。宴席は田村さんの独壇場になるのが常ということだったが、今回は我が20期の熱血漢の松下君がはるばる鎌倉から参加してくれ、山小屋酒場はさながら「二人のビッグショー」というところだった。

翌日、皆が帰ってしまうので里心？がつかれたのか、田村さんも我々に同道されて、金大ワンゲルの新しい部室を訪ねられた。

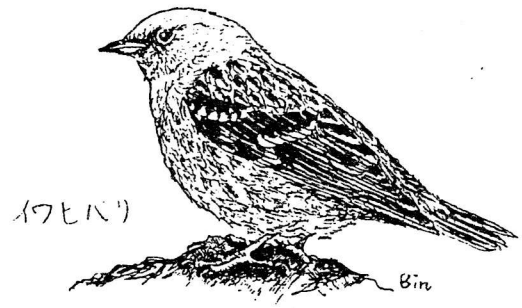
丁度、昨日先に帰った現役部員が3人居て、近況を聞くことができたのだが、部室を後にしてから田村さんが「彼等の言葉は速すぎて、ついていけない」とおっしゃる。田村さんも調子が出ると結構速いし唾も飛ばすし…と思ったが、確かに彼らの語りと田村さんの語りとは違っていた。

彼らはバラエティ番組の司会よろしく、軽いノリでぼけたり突っ込んだりしているのだが、田村さんは、自分の所感を溢れんばかり情熱でまくしたてるといった感じである。丁度中間の年齢にあたる我々の会話はどのように聞こえているのだろうか？

その後、20期の松下、栃尾、私と田村さんの4人で石引温泉に浸かる。さっぱりしてしまうと、明日からまたベルクハイムに戻られるという田村さんのご苦労が身にしみるとともに、それを苦労と感じていない田村さんの「異常さ」が、良く分かるのだった。

今回の山小屋酒場、天気も良くないし、仕事もひどそうだし…と、あまり乗り気ではなかったのだが、知らなかったＯＢと知り合うことができて、とても良かったと思っている。この年齢になると、新しく知人ができるというのは滅多にないことなので、貴重な経験だった。

3期の小林さんの家に泊まるという田村さんを近くまで送り、松下を金沢駅で見送って、一件落着となったかに見えたが、田村さんが財布をなくされて途方に暮れ、栃尾君と一緒に探し回るという後日談があった。ようやく石引温泉で見つかり、その夜は二人でまた盛り上がったとか…。ご苦労様でした。



暁風翁日記

暁風（昭夫の号）

9／25（水）晴

本日より小屋番に復帰す。会津の自宅を出て早一週間過ぎた。

「もの書きは二流人間のするもので、一流人間は行動をする」と一昨日ワンゲル12使徒の前でのたまいてしまったが、書くことも、師の行動を見ていない愛弟子の為のサービスだと思って、一段と重くなった鉛筆を又とる。

どうでもいいけれど、よくもこんなに大量の食糧を私の為に残しておいてくれたものだ。太平洋戦争時代の食糧難を生き延びてきた私が、食べ物の誘惑に如何に弱いかを、知ってか、知らずか。60年の人生を「粗食深考」を信条としてきたが、今それが音をたてて崩れんとしている。「ひょっとして、皆でよってたかって私を糖尿病にして、倉谷から天国へ直送する気ではないか」と勘繰りたくもなる。よほど意志堅固にしないと彼等の思うつぼになる。私には為さねばならぬ仕事がある。

9／26（木）曇だが晴

ああ、なんという幸せ。朝7時、舟田女史の作っていってくれたおでんを温め、うんとカラシをきかせてアツアツを食う。左手には月桂冠の桃ジュース割。カラシ汁に食パンを浸して食う。いとおかし。よく考えてみると、よく考えなくてもそうだが、私はワンゲルＯＢ会の食客なのだ。このようなくだらない文章を綴りながら食えるなんて、これ以上の幸せやある。これでは修行どころではない。徹底的に堕落してやる。外は曇、でも心は晴だ。カラシがキクーッ。諸君、会費を納めよう。

でけた。

「閉経の妻を想いてかくセンズリに
　　鳴き声合わす秋の虫　　暁風」

又でけた。

「秋の山路は楽しきものよ
　　松茸、あけび、栗取りす　　暁風」

高三郎にかかる中秋の名月を愛でし句。

「月の頃、土手にススキが生えにけり
　　読み人知らず」

（蛇足…月の頃；初潮の頃
　　土手にススキ；恥毛）

9／27（金）曇

山小屋酒場は今日も朝から開いているのであります。今日のメニューはおでんに日本酒のリプトン紅茶割。とてもよく合うのです。マスターは一人紅茶酒をすすりながら、遠い昔の失恋の数々を、ほろ苦さに砂糖の甘さを混ぜて追想するのでありました。

（その1）

万年大学生の私に「…今、縁談があるのです」とその人は云った。思わず抱きしめようとした時、片手に持っていた風呂敷の中のリンゴが、雨あがりの歩道に転がり落ちた。抱くのを忘れて、転がったリンゴを拾う私をケイベツの目で見ながら立ち去った人。つつがなしや。

（その2）

愛の営み中、背中に回されたＡ子の指が、私のシャツの破れ穴に差し込まれた。私は恥ずかしさと屈辱に思わず我が身を離してしまった。あの時のあの人の眼を忘れず。

（その3）

「今、寿司頼んだから、もうちょっこし待ちまっし。」と云われて待つこと一時間。やっときた寿司を頬張りながら駆けつけた約束の喫茶店。ウェイトレスから手渡された一枚の紙片。Ｂ子よ、今何処に。

（その4）

「田村さんはもう卒業ですね。就職はどこにお決まりですか。工学部は引く手あまたでしょう」と彼女。「はあ、僕はもう少し大学に残るつもりです」と私。一月ほど後、彼女から手紙がきた。それには「私は金沢を離れます。その前に一度あなたにお会いしたく思います」とあった。不甲斐なき私は泣きながら、その手紙を破り捨てた。Ｃ子は今誰のものか。

午前10時頃、福光の橋本氏が、高三郎に登りに来た。午後4時頃下山。小屋に立ち寄った。意気投合す。

9／28（土）快晴

今日は水平道の草苅に出る。途中で玉井さん家族（4人）に会う。玉井さんは鹿野教授夫人の友人。小屋に入ってもらい接待す。私の馳句、名句を見せたら喜んでいた。小学4年生の息子を今夏、北海道の野性塾に送ったそうな。野性塾の塾長は四高の出身で67才の人だと云う。有名な児童文学者で素晴らしい人物だそうである。金沢からは人材が多く出る。我々も先輩の後に続こうではないか。

9／29（日）晴

「キツネは沢山のことを知っているが、ハリネズミはでかいことを一つだけ知っている」（外国の諺）私がネズミ歳生まれだからではないが、ハリネズミの方が好きである。「でかいこと」とは何か。神の存在、宇宙の真理かもしれない。知識などこれに比べれば全く無価値である。ハリネズミは知識もなく学もない。しかし生活と体験で得た大きな信念を持っている。周囲からいかなる妨害や中傷を受けようと、それをはねつける強いハリを持っている。信ずる道をまっしぐらに突進していくハリネズミに乾杯！

9／30（月）曇

「おもしろき、こともなき世をおもしろく、
　住みなすものは、心なりけり」

高杉　晋作の辞世。

皆んなで楽しくぱーっとやろうぜ。ワンゲル酒場甚句。

”この世は酒飲んで、騒いで、ハイさようなら。
　　サノヨイヨイ”

”神をたたえて　酒飲んで踊れ。
　　サノヨイヨイ”

”金を貯めたい奴、貯めるがいいサ。おいらがそれを使ったる。　サノヨイヨイ”

”忙しくもないのに　忙しがりゃいいサ
　アクセクと死んでゆけ。　サノヨイヨイ”

出けた！閑経の妻シリーズ第２弾。

「閑経の　妻ノタウチまわらす我が技に
　我満ち足りて　共にはてなむ　暁風」

”うまいもの食いたきゃ　食えばいいサ
　そしてビリクソこけばよい。サノヨイヨイ”

”いいもの着たけりゃ着るがいいサ、
　風呂じゃ醜体かくせない。　サノヨイヨイ”

”御殿に住みたきゃ住むがいいサ
　地面ひとゆれハイおしまい。サノヨイヨイ”

10／1（火）曇

「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由の君主であって　何人にも従属しない
　キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって　何人にも従属する」　ルター

これは一見矛盾しているようだが、矛盾していない。権力には従属しないが、全て平等に奉仕するのがキリスト者であると云うことである。キリスト者をワンゲル部員に置き換えてみたらどうだろうか。

もしクラブに権力機構のようなものがあったとすれば（ワンゲルには絶対ないと思うが）それには服従しなくてもよい。クラブの一員としてクラブ員全員に奉仕して欲しい。一人は皆の為に、皆は一人の為にあることを、クラブ活動を通して学んで欲しいのだ。他のクラブと異なってワンゲルは寝食を友にした仲間達だ。この体験は必ず社会に出てから生きてくる。

舟田女史と山口君の論争楽しく読ませてもらいました。一ＯＢの感想を込めて書いてみました。

10／2（水）晴

昨日にひき続きお二人の論争に加わらせていただきます。ワインと日本酒の番茶割の勢いを借りて書きます。

舟田女史の現代の世相、青年の価値観の分析まさにその通りです。私達は所詮時代の申し子でしかないのです。ワンゲルの将来と云う議論を通して日本の将来を憂うジャンヌダークを、女史に私は見出します。あなたが云われているのは一大学の一つの部についてではなく、日本の教育、日本の政治、日本の未来を問うことなのです。頑張れ！和製ジャンヌ・ダーク。

水平道整備に行く途中、元倉谷住人、山下忠氏（65才　湧波町４丁目）と話し合う。山下氏は金沢市職員だった人で、「青少年の森」に炭焼小屋を作り、青少年に炭焼実習を指導している人である。私の炭焼の里復活案には大賛成してくれた。それには営林署の許可がいるとのこと。「その方は私に任せて下さい。」と別れた。来年はやれる！見通しは明るい！

倉谷産の木炭がボートで運ばれてゆく図が目に浮かぶ。

10／3（木）曇のち雨

散歩の途中、山下氏に会った。ダムの人達の宴会用にゴリを採りに来たという。土・日を除いて天気のよい時はほとんど来ているそうである。土・日は街の人達の邪魔にならないようにと来ないそうである。私は山下氏に山人の優しさを見た。街の人達にこの山人の優しさを伝えたい。

10／4（金）晴のち曇

運動不足と夜が長いのとで2時から起きている。私の敬愛する綾井英二先生（プラスチック加工の権威　中小企業庁技術アドバイザー）が著書に

「サラリーマン社会というのは、馬鹿を優秀な人間が養うシステムだ。得をするのは馬鹿な奴だけだ」

と述べている。私もこれには同感した。私ばかりでなく、この本を読んだサラリーマンはかなりの数、会社を後にしたという。様々の会社の社長が綾井先生のところに苦情の電話をよこしたそうである。サラリーマンに限らず、同年輩の5％が、他の95％を助けているのが実情だ。日本の将来は5％の日本人の肩にある。自分を5％の人間と思う者、しっかりしなくてはならない。

今日も朝食をおいしくいただけたのは全てワンゲルOB会様のおかげです。いくら感謝しても感謝しきれない。OB会のご好意に答える為にも、修行に励まなければならない。聖書、科学史、トポロジー、etc.

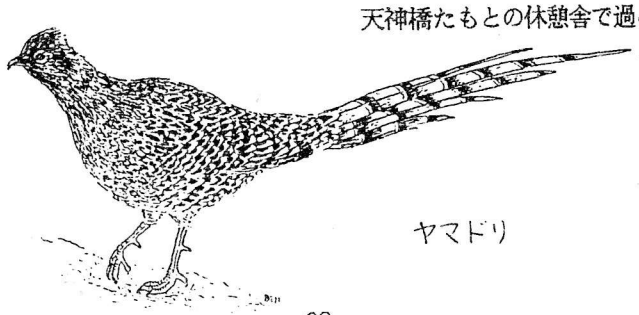
山下さんの小屋の前に折りたたみ式寝椅子が放置されていたのでBergheim備品としていただいてきた。山下さんの相棒、東さんに事後承諾。ベルレーヌの詩を口ずさみたくなるような秋の午後でありました。

10／5（土）晴－曇－雨－曇

栗拾いに出る。お目あての栗の木の下には既に先客がいた。カモシカである。彼のエサ場を邪魔しないように道に落ちていた数個で我慢した。方励之著「宇宙のはじまり」（講談社、ブルーバックス）を読む。科学をやるらは必ず信仰がなければならぬ。本物の科学者は信仰を持っている。アインシュタインは信仰を否定して、人間の知性で自然が解明できると思い上がっていた。科学を支えるのはキリスト教的世界観である。日本には無神論をとる科学者が多い。西欧から科学が伝わった時、科学の知識と、その底流となる精神を切り離した日本の為政者が悪い。科学者も信仰と迷信を混同し、非科学的と云う言葉でひとくくりにしている。

ニュートンは晩年神の証明に心血をそそいだという。自然は聖書の別冊とする思想が、自然科学の精神である。したがって信仰なくして自然科学はありえない。

(10／6（日）晴　この日、鹿野教授夫人と彼女の友人玉井さんが、ボートに乗って倉谷を訪れました。鹿野さんは高三郎の途中まで登山。田村さんは急遽荷物をまとめられ、小屋じまいをされて一緒に下山されてきたそうです。私は福井経ケ岳に登ってきた日で、就寝前のもう一仕事で学研の部屋の明かりをつけていたところ窓の外から呼び声。田村さんが金沢最後の晩を天神橋たもとの休憩舎で過ごそうとされている



ヤマドリ

ことを知りました。生命あふれる季節の頃と違い、冬に向かう季節は侘しさも募ります。精神衛生上よくないなあと気掛かりでしたので、めでたしめでたしでした。

翌日、一緒に読売会館へ宮本憲一氏の講演を聞きにいき、この講演に誘って下さった鹿野夫人が、環境を守るための運動、特に産廃不法投棄の調査のために山奥に入られていることを知りました。犀川に危険な水が入りこんでいること、住民運動としては動かぬ証拠をつかんで行政につきつけるしかないこと。利権でしか物を考えていないやくざまがいの業者との間で危ない目にも遭うこと。しかし感情だけでは運動は進められないので、調査のための人、特に土地勘があって調査できる人が欲しいのだとも言っていました。私はことの重大さを感じながらも、泥沼はＯＢ会だけで手一杯という感じで、ろくな反応も示さず帰ってきました。

ともあれ、田村先輩は７日、福島へ帰られました。）

舟田様

金沢在住期間中はお世話様になりました。今年は春からついていました。金沢が私を父祖の地へ呼び戻してくれた感がいたします。

今後は学生時代の様に、夏休みはオロロ休暇を会津で過ごし、春や秋は金沢で暮らす生活になりそうです。

宮本憲一先生の講演には反省させられたことが多くありました。被害者意識には敏感であるが、加害者意識には鈍感な自らを思い知らされました。プラスチック加工の技術者として耐候性のある丈夫な製品を開発してきた私は、その製品の使用期間が切れて廃棄される時のことなど考えもしなかった。私達技術者が作った物が自然をどれだけ汚染しているか、その責任とことの重大さに胸が痛みます。鹿野さん達は産廃処理業者を糾弾していますが、本当は企業に責任があるのです。処理業者はメーカーの罪を引き受けた、気の毒な羊です。糾弾されるべきは廃棄物質に手を焼いて、処理業者に引き取らせているメーカーにあるのです。私は処理業者に顔向けできません。私の為すべきことは、回収・処理作業なのかもしれません。ユートピア建設はその後に来るものだと思います。　敬具

田村拝

綾井　英二氏のエッセーから
（東大工学部造兵学科・工業化学科卒
元中小企業庁技術アドバイザー）
…ワインシュタイン氏の名付親

会津のワインシュタイン

平成８年３月20日

ある日ＮＨＫテレビの朝の番組を見ていたら彼がいた。会津の哲人、我が弟子ワインシュタインである。早速電話してみると、やはり彼であった。会津の伝統工芸、漆の技術の保存に漆の木から樹液を採る会の話だった。

その後郡山に行った時、その時の事情を詳しく聞くことが出来た。

「驚いたよ。君が出てるナンテ…」

「いや、テレビで放映したのは極一部なんですヨ。実は漆を掻く時、会のリーダーの先生が漆なんて慣れるとあまりかぶれないものだと言われましたもんで、テレビ局の女の子にいいとこ見せようと、私が裸になって、漆の木に抱きついて見せたんです。顔も擦りつけて」

「それで何ともなかったんか？」

「いや、２－３分したら身体中かぶれてきて、顔なんか見るに堪えない程腫れ上がってしまいました。」

「そりゃそうだろう。それでＮＨＫはビデオに撮ったんか？」

「撮るには撮ったんですが、余り残酷なシーンなんでカットされました。」

その後治るまで一週間位かかったそうだ。大変な弟子である。

彼との付き合いは、十五年前に会津若松の会社の指導をした時に始まる。ホテルのトイレで

「弟子にしてくれ。」

と頼まれた。

「僕は弟子はとらない。」

と断ったんだが、トイレに正座して

「お願いです。」

と言う。

「弟子にしてくれなければ、トイレから出さない。」

何時迄もトイレに居る訳にもいかない。「マア、マア。」と言っているうちに弟子になってしまった。文字通り臭い仲である。

技術はともかく、純粋さは人後に落ちない。ある時

「宇宙飛行士になる。」

と言いだした。

「好きにしたらいい。」

内心試験を受けたって、どうせ落ちるだろうとたかを括っていた。まさかと思っていたら、ホントに願書を出してしまった。勿論不合格だったのだが、何故不合格になったのか、理由を聞くために東京迄出掛けたのだから驚いた。

「俺が落ちる筈が無い。」

と言うんである。…ドンキホーテが現在でも生きていると思った。直情径行、思いたったらやらねば済まない。ホドホドにしないと、奥さんが迷惑する。

また、孤高の人でもある。日本の将来を憂い悲憤慷慨して、語り出すと止まらない。

「日本が今日のように堕落したのは、戊辰戦争で会津が負けたことに端を発するんだ。」

と言う。

「そう昔のことを言うなよ。俺はまだ生まれてなかったんで良く分からない。」

と宥めるしかない。

孤高であることは、俗人の理解を得られないことでもある。会社勤めには向かない。サラリーマンというのは、嫌な仕事をガマンしてやる

から給料が貰えるんで、彼のように嫌なことはやらないのでは所詮勤まらない。と言って、他の商売でも、人を相手にするものは、多少は妥協しないとやっていけないものだ。

自分でも分かっているのだろう。一人でやれることを考えた。

「人力車を引いて、観光客の案内をします。」

と言い出した。五年程前のことである。郡山で講演会をした時、わざわざ会いに来てくれて、滔々と人力車の人文学的価値を語り出した。どうやら、人力車の元締めになる気らしかった。アイディアは悪くないと思った。最近になって、京都でマラソンの選手がアルバイトにやりだした位だから、先見の明があると言える。それに人力車を引くのは一人で出来るから、彼に向いているとも思った。残念ながら奥さんが体裁悪いと反対したことと、会津若松では観光客が少ないことから、実現しなかった。

かたわら、彼は現代の師弟を鍛え直すと言うことで私塾を開いた。訪ねてみると、彼の家の門に「獅子塾」と書いた大きな板がかかっている。

「まるで吉田松陰みたいだナ。」

と言ったのだが、生徒が来るかどうか心配だった。今年山形に行った時、その顛末を聞いたのだが、

「アアあれは、生徒はいたんですがみんな出来が悪いので破門しました。」

ウチのポチは感心していた。
「あんなことしてたら、ピアノの先生でもみんないなくなってしまう。カッコいいこと言って、生徒に愛想をつんされたんとちがう？」
言うもんである、我が奥方も…。
それやこれやで、目下朝早くから新聞配達しているのだそうだ。これならケンカも出来ないし、健康にもいい。彼は欲は無いから、それでワインを飲みながら、アインシュタインの哲学を一日中考えて時間を潰しているんだそうだ。テレビもくだらないから原則として見ない。ただし木曜と金曜はＮＨＫの「お江戸でござる」と「とうりゃんせ」を見せてもらうのだそうだ。それでも奥さんに気を使って、自分から座敷牢に閉じ籠もって謹慎しているんだとうそぶいていた。
「一日が長く感じられます。」
「そうだろうナ。フィジーの土人と同じ生活だからネ。きっと肩もこることは無いだろうネ」
「その通りです。全く肩はこりません。アハハ」
僕はポチに言ったものである。
「あれが会津のワインシュタインだよ。」
山形駅で別れる前に、彼が励ましてくれた。
「先生、あと少しの辛抱ですから、ラストスパートして下さい。」
それってもしかして、もうじきクタバルから急げ、ってことじゃないのかな？
「先生が呼んでくれるんなら、いつでも大阪に行きます。ナーニ、ダンボール一枚あれば、住む所には不自由しません。」
ホームレスが弟子では困るんだよナー。しかし、彼のような人が政治していたら良かったのにとも思わないでもない。

その後のワインシュタイン

平成８年４月10日

先の一文はワインシュタイン君にも送った。一月後、出光が彼を招いて若い人達に紹介したところ、寝袋をリュックに入れて飄然と姉ケ崎の研究所に現れた。その夜の泊まりはまだ決めていない。その席で追記を申し込まれた。
「先生、私は漆の木に抱きついただけじゃないんです。漆の液を採る溝をベロベロなめたんです。」
「そりゃ大変だ。それでどうなった。」
「みるみる内に、口中腫れてきて、見るも無残な姿になりました。しかし面白いですね。口の中は真っ黒になって、２－３日したら唇ごと剝げてしまいました。」
おそらくその間、何も食べられなかっただろうに…えらいことをやるもんである。

その時、気になることを言っていた。
「５月から炭焼きをやろうと思って、ただで泊まれる山小屋を探したんです。金沢の山の中にいいのがあるんで…酒は山ぶどうなんかありますから、用意しときます。ナーニ猿だって酒くらい造るんですから、任しておきなさい。先生、金沢に来たら、泊まりがけで来て下さい。」
「だって、寝るところがないだろ。」
「心配ありません。寝袋を用意しとくから…」
「でも、山の中じゃ、自動車は使えないだろ」
「先生なら10キロや20キロ歩かしたって大丈夫です。」
トンダことになってしまった。フィットネスで鍛えたのも善し悪しだ。10キロ歩かされて、猿酒を飲まされて、寝袋で寝させられたらエライことになる。
大阪に帰って来ると、間の悪いことに５月に金沢から指導を依頼してきた。ほっておく訳にもいかないが、猿酒もいただけない。ワインシュタイン君に連絡したもんか、どうしたもんか目下思案中である。